



CALL教室を利用した英語授業

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-12-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 増木, 啓二 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00007603

CALL 教室を利用した英語授業

増木 啓二*

English Lessons Utilizing the CALL System

Keiji MASUKI*

要 旨

平成2年より使用してきたLL教室に替わって平成17年10月にCALL教室(Computer-assisted Language Learning「コンピュータ支援による言語学習」システムを備えた語学教室)が本校に設置された。これにより、従来の聞く・話すという音声面の演習における活用に加え、英文法や英作文演習での活用、インターネットやオンライン教材の利用などが可能となった。以来、本校では本科一般科目英語の授業を中心に、CALL教室をさまざまな形で活用してきた。本稿では、筆者が主として担当した平成19年度の授業を中心に、本校におけるCALL教室の活用状況、学生の反応等について報告する。

キーワード: CALL 教室、英語学習、e-Learning

1. はじめに: 本校 CALL 教室の概要

教室は従来のLL教室を使用し、機器・システムを更新した。学生用には、48台のパソコン、モニター、ヘッドセット、2名に1台の中間モニターがある。各パソコンはCALL教室用サーバを通じて学内ネットワークに繋がっており、Webページを見ることが出来る。音声機器に関しては、従来の機械式レコーダではなく、ソフトレコーダ(パソコンソフト上の録音再生装置)になっている。教員用パソコンでは各学生のパソコンのモニタリングや制御が可能である。また、e-Learning用教材を作成するためのソフトウェア「作って教材」もある。これは学内ネットワークを通じ、研究室にある教員の個人用パソコンからも使用することができる。他の設備としては、プロジェクタやマイク、スピーカ、教材提示装置等があり、プレゼンテーション等の活動にも利用可能である。

2. 平成19年度の授業例

平成19年度筆者が担当した科目のうち2科目について、そのCALL教室活用の詳細(①内容、②学生の反応とその分析、③問題点と対策、④展望)を報告する。

て、そのCALL教室活用の詳細(①内容、②学生の反応とその分析、③問題点と対策、④展望)を報告する。

2.1 平成19年度「英語表現Ⅰ」(1年、通年2単位)

①内容

同科目では、英語表現の基礎となる英文法の解説と演習を中心に授業を展開した。主たる教科書は文法問題集(“Harvest English Grammar in 25 Lessons”桐原書店)で、普通教室における授業が主だったが、月1～2回のペースでCALL教室での授業を入れた。

CALL教室での授業で使用した教材は、副教材の英文法問題ワークブック(「書いて覚えるパターンブラクティス」桐原書店)であった。このワークブックは本来、授業や家庭での復習用を想定したもので、CALL教室で使う必然性は特になかったが、家庭学習したものをパソコンで答えあわせする、という形で使用した。普通教室では一斉学習がほとんどであるのに対し、CALL教室ではパソコンを使用した個別学習の形態になるので、単調になりがちな問題演習にアクセントをつけられ、またできるだけ多くの練習問題にあたらせることもできる、と考えての導入であった。なお、文法問題演習のための使用であるので、従来のLL機能(聞き取り、会話演習等)は活用していない。

(i) 準備

教員がワークブックの問題文と解答、解説を「作って

2009年8月20日 受理

* 総合工学システム学科 一般科目文系

(Department of Industrial Systems Engineering: Liberal Arts)

教材」を使って事前に教員用パソコンに打ち込み、問題を用意しておく。(基本的にはワークブックと同じ問題であるが、解答の仕方をパソコン用に若干アレンジしている。解説は教員の自作で、適宜入れている。また、解答の時間制限を設けたり、合格点を設定したりしている。)

(ii) 授業

学生は、事前に宿題として範囲指定されていた単元の問題を、パソコン上で解答していく(選択肢から選ぶ、解答を入力する、など)。制限時間内に「採点」を押して「合格」「不合格」の判定を受ける。「解説」を見て正答を確認し解説を読む。ワークブックの自分の解答を丸付け、訂正する。次の問題へと進む(以降同様)。教員はその間、学生の画面をモニタリングしたり、学生の質問を受けたりしている。授業後、学生はワークブックそのものを提出する。

(iii) 事後処理

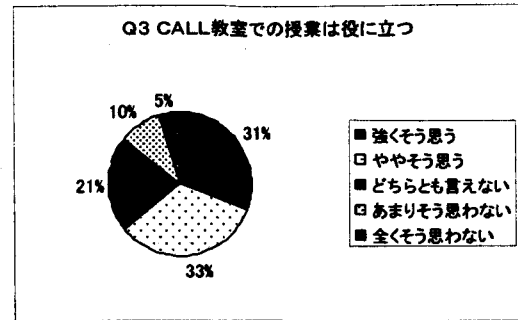
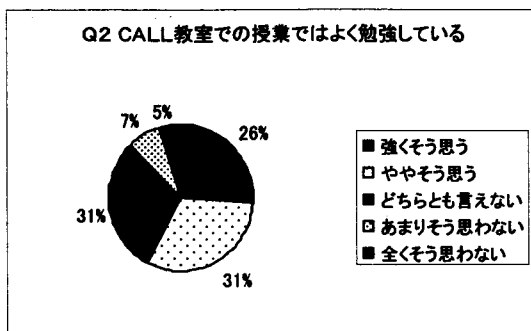
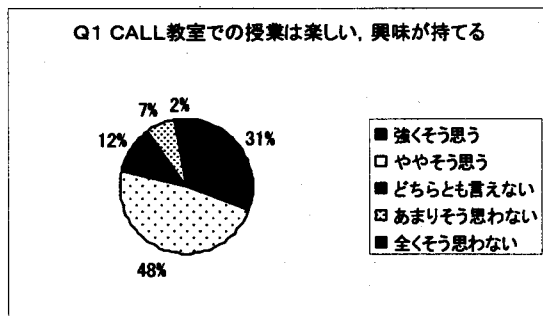
教員は、後日教員用パソコンに記録された学生の得点や受講状況等のデータを引き出し、小テスト点として成績評価に加えるなどする。

② 学生の反応とその分析

(i) 当初の反応

5月下旬よりCALL教室の使用を開始したが、学生は珍しさもあってか、かなり熱心かつ生真面目に取り組んでいたように見えた。当初の導入意図に沿う成果が一応得られた、という感触であった。前期末時に行ったアンケートの結果にも、この傾向は現れている。

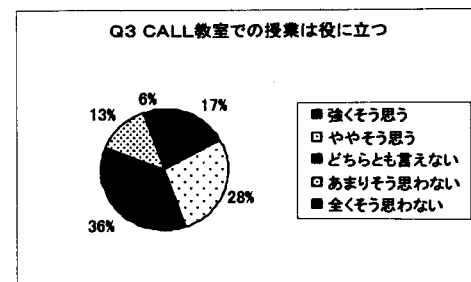
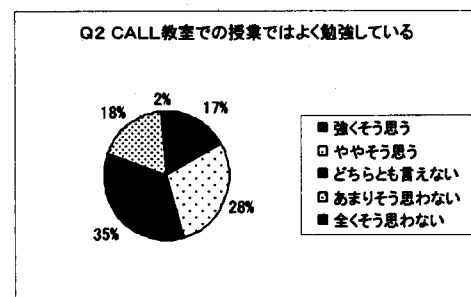
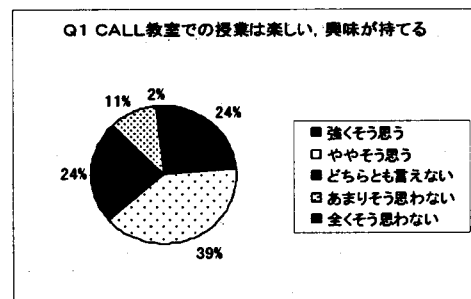
[前期末時、1年1クラス42名対象]



(ii) 学年を通じて

年間を通じて、多くの学生は概ね真面目に取り組んでいた。学年末時に行ったアンケート結果によれば、当初と比べると意欲に欠ける学生が増えたのは事実だが、半数以上の学生からCALL教室を利用した授業は「楽しい、興味が持てる」との評価を受けている。個別学習によって問題演習にアクセントをつけるという目的は達することができたと判断している。ただし、多くの練習問題にあたらせることができたかということや文法力をより強化できたかということについてはまだまだ改善の余地があると思われる。

[学年末時、1年3クラス123名対象]



Q4 CALL教室での授業で良いと感じる点	1-1 前期末 42名中	1-1 学年末 39名中	1-2 学年末 42名中	1年 総合 123名中
自分のペースで学習できる	29	20	19	68
解答、解説を素早く参照できる	16	14	11	41
パソコンなどの機器の操作が楽しい	14	9	7	30
自分の学習に集中できる	15	8	5	28
教材が工夫されている	9	4	4	17
多くの問題をすることができる	7	1	2	10
音声が届き取りやすい	2	5	1	8
タイピングの練習にもなる	1	1	2	4
「合格」が出てうれしい			1	1
解説が詳しい			1	1
良いと感じる点は特になし	5	8	8	21

Q5 CALL教室での授業で良くないと感じる点、改善したほうが良いと思う点	1-1 前期末 42名中	1-1 学年末 39名中	1-2 学年末 42名中	1年 総合 123名中
疲れる	18	15	14	47
パソコンなどの機器の操作が難しい	11	19	10	40
単調になる	9	8	14	31
移動がめんどろ	11	11	7	29
パソコンなどの機器の性能が不十分	4	7	4	15
教材が面白くない	2	1	6	9
空調の効きが悪い	2	1	3	6
タイピングが苦手、時間がかかる、面倒	2	3	1	6
制限時間が短い			4	4
採点方法に不満がある		1	2	3
答えの言葉の自由度がない	1	1	1	3
書くほうが勉強になる、覚えられない	1		2	3
答え合わせが面倒、やりにくい		1		1
個人差が出る		1		1
時間がかかるわりに効率悪い			1	1
間違ったところがわかりづらい	1			1
良くないと感じる点は特になし	8	8	2	18

③問題点と対策

(i) タイピングが苦手な学生

タイピングが苦手なため進度が遅くなったり、タイプミスによる不正解が出てストレスを感じている学生が見られた。これに対しては、解答形式を元の全文解答式から穴埋め式や選択式に代えるなどの対策を一部とった。ただし、基本的にはタイピングも含め練習になると考えていたので、解答形式を簡単にする変更は全面的には行わなかった。

(ii) 解答だけを先に見る学生

解答を入力することなく「採点」をして(当然「不合格」の表示が出るのだが)「解説」にある「解答例」を見る学生がいた。これに対しては、ワークブックの答え合わせが主なのではなく問題を再度解いてみるのが重要だと

学生に強調した。また、このようなやり方をしていたことが受講データから判明した場合には評価しないようにし、その旨を学生に伝えた。

(iii) 準備・事後処理に費やす教員の時間と労力

特に準備に関しては多大な時間と労力を要した。科目担当者(2名)である程度分担したが、慣れによる要領のよさ以外には有効な対策は見つからなかった。

④展望

今回、CALL 教室を利用して英文法の演習をさせる試みを行ったが、CALL 教室をリスニングなど音声面以外でも活用ができることが確認できた。

筆者は、過去、一般のコンピュータ教室(CAI 教室)を利用して、同様の授業を行ったことがあるが、当時のエクセルを使用した自己流のやり方と比べると、CALL システム専用のソフト「作って教材」は格段に本格的なものであり、手間もかなり省けるようになっている。とはいっても、教員の準備の負担は相変わらず多めで、負担に対する効果という面から考えると、もっと効率的な取組みが望まれる。

たとえば、今回は、本来書いて練習するという趣旨の英文法ワークブックを CALL 演習用に流用した形であったが、中途半端な面があったことは否めない。問題点でもあげたが、解答形式がパソコンの入力に向いていない問題が多くあり、タイピングという他の技術的要素に左右される割合が高くなってしまった。やはり、今後は既存のワークブック等ではなく、コンピュータを用いた個別学習の形態にふさわしい形式の問題を使用していく方向が望ましいと思われる。そのために考えられる一つの方法としては、教員(複数が望ましい)による問題の自作である。この場合、時間と労力がかかったとしても活用は1年限りのものではなくなる。また、発想を変えて、市販の英文法演習ソフト(適当なものがあればだが)を導入することも十分検討の余地があるだろう。

CALL 教室での英文法演習は、現段階では、今回のようにあくまで普通教室での一斉授業を補完するものであるが、CALL 教室で使える適当な演習問題の量が十分に確保できれば、将来的には両者の立場が入れ替わるかもしれない。

2.2 平成 19 年度「英語Ⅳ」(4年、通年 2 単位)

①内容

同科目では、TOEIC テストを意識した、リーディング、リスニング、文法・語法の演習を行った。教科書は「Power-Up English <Intermediate>」(JACET リスニング研究会、南雲堂)で、他に前学年から継続して英単語集「Vital 3000」(文英堂)を用いた。2時間連続の授業

のうち最初の1時間は、普通教室で単語テストと教科書の各 Unit のグラマー、リーディングのセクションの問題演習を行い、後の1時間はCALL教室での演習にあててを基本とした。(ただし、教科書の進度等によって2時間の授業構成にはかなりばらつきがあった。)

CALL 教室で行った授業活動のうち学生が各自のパソコン端末を使用して行ったものは、以下のとおりである。

- a) 教科書のグラマー問題、リーディング問題の答え合わせの一部(大部分は、普通教室で解答した)
- b) 教科書のリスニング問題演習
- c) 「作って教材」用の TOEIC 演習ソフトによる演習
- d) 英単語集 COCET3300 のオンライン学習などである。(“Vital 3000”を終えた学年末の時期に行った。)

(i) 準備

a), b) については、教員が事前に「作って教材」を使って、教科書の問題文(b)の場合は音声ファイルもとと解答、解説を教員用パソコンに打ち込み、問題を用意しておく。c), d) については、演習の要領を最初に説明するだけで、教員による毎回の準備の必要はない。

(ii) 授業

a), b) については、前述の「英語表現Ⅰ」の場合と基本的に同じである。c) についても、他の教科書・ワークブック等に基づかない独立した TOEIC 演習教材である点を除けば、演習の流れは同じである。(どれも「作って教材」の受講選択画面からスタートする。)問題は TOEIC テストの形式に倣っていて、授業ではリスニング・セクション(Part 1～4)のみを扱った。d) では、インターネットからオンライン学習サイトにアクセスし、学生各自が自分のペースで問題演習を進めていく。(この活動に関しては、第3学年「英語Ⅲ」で本格的に行われていた。詳細は、本校研究紀要第42巻(2008年7月)「オンライン教材 COCET3300 を利用した英単語学習(西野)」を参照されたい。)

(iii) 事後処理

a), b), c) については、「英語表現Ⅰ」の場合と同様である。d) についても、オンライン学習サイトに教員・管理者として入り、学生の受講状況・成績データを引き出し、成績評価の一部として利用した。

②学生の反応とその分析

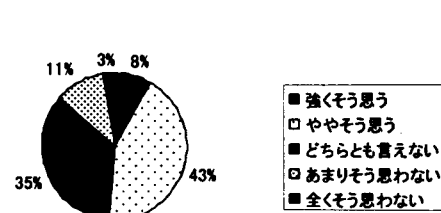
(i) 当初の反応

教科書、単語集ともに CALL 教室を使用しなくても授業が進められる(単語テストはホームルーム教室のほうが適当)状況での CALL 教室使用ということで、学生には CALL 教室を使う目新しさによる動機付けは、1年の「英語表現Ⅰ」と比べると、あまり見られないようだった。

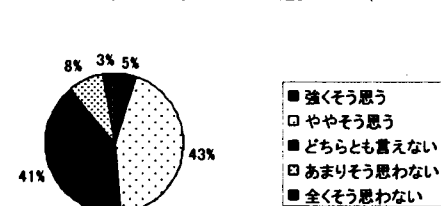
また、ホームルーム教室から CALL 教室への移動が面倒だというような感想も聞かれた。

[前期末時、4年1クラス 37 名対象]

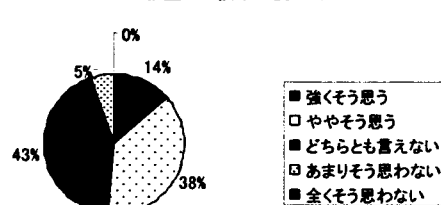
Q1 CALL教室での授業は楽しい、興味が持てる



Q2 CALL教室での授業ではよく勉強している



Q3 CALL教室での授業は役に立つ

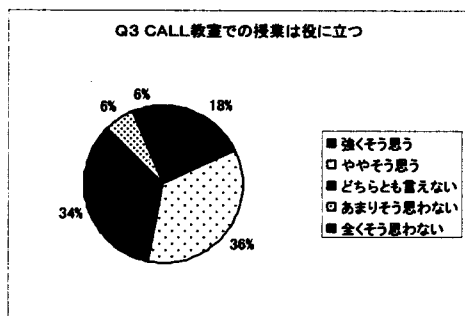
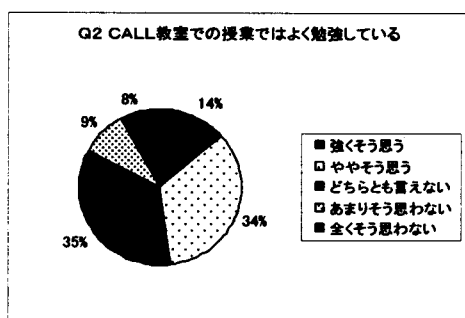
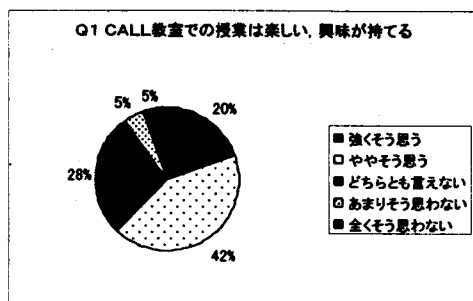


(ii) 学年を通じて

学年を通して CALL 教室で行った活動は c)のみであるが、TOEIC テストのリスニング問題の形式に慣れるということではよい活動であったように思う。ただ、時間の関係で問題演習がほとんどだったため、復習・積み重ねといった面では不満が残るところである。(学生の多くは、Part 3, 4 あたりにはついていけない状況だった。)後期以降、a), b) のような教科書に即した活動を増やしたが、学生は概ね真面目に取り組んでいたように見えた。特に b) は音声ファイルを入れた形で問題化することで、個人学習の形態がとれるようになりよかったと思う。d) は従来式の単語集学習の後で導入したため、目新しさも手伝ってか、学生は楽しそうかつ意欲的に取り組んでいた。やはり、オンライン学習という CALL 教室にふさわしい活動だったことが大きな要因だったと思われる。全体

として、CALL 教室の機能を生かした授業展開ではなかったが、普通教室ではできない部分を補えたのではないかと思う。アンケートでも、学年末時のほうが「楽しい、興味が持てる」の割合が増加するという結果となった。

[学年末時、4年3クラス 111 名対象]



Q4 CALL教室での授業で良いと感じる点	4E 前期末 37名中	4E 学年末 33名中	4M 学年末 41名中	4年 総合 111名
解答、解説を素早く参照できる	20	12	15	47
自分のペースで学習できる	10	16	17	43
教材が工夫されている	6	13	11	30
パソコンなどの機器の操作が楽しい	4	4	19	27
自分の学習に集中できる	10	7	8	25
音声聞き取りやすい	2	5	9	16
多くの問題をすることができる	6	3	4	13
リスニングができる	1	1	1	3
COCET新鮮、よかった		2		2
インターネットを見て他のことができる			2	2
点数がつくので緊張感がある		1		1
良いと感じる点は特につない	9	4	3	16

Q5 CALL教室での授業で良くないと感じる点、改善したほうが良いと思う点	4E 前期末 37名中	4E 学年末 33名中	4M 学年末 41名中	4年 総合 111名
移動がめんどろ	18	16	23	57
疲れる	11	7	14	32
単調になる	3	5	9	17
教材が面白くない	5	3		8
パソコンなどの機器の性能が不十分	2	2	1	5
音声聞き取りにくい	1	3		4
COCET		1	1	2
パソコンなどの機器の操作が難しい			2	2
周囲が騒がしい		1		1
パソコンのエラー		1		1
制限時間が短い	1			1
TOEICテスト前に予習時間が欲しい	1			1
自由なペースでやれない	1			1
難しい	1			1
空調が効きすぎ	1			1
空調の効きが悪い	1			1
画面を見ていると眠くなる			1	1
TOEICがづらい			1	1
全員が取り組めるような仕組みを			1	1
良くないと感じる点は特につない	7	5	6	18

③問題点と対策

(i) 普通教室での授業との兼ね合い

教科書の進度の関係で、CALL 教室の活動時間・内容が不安定だった。教科書の問題を普通教室で考えさせ CALL 教室で答えあわせをするなどの融合化を図ったが、消化不良の面は残った。

(ii) CALL 教室の機能をいかした演習の時間の不足

これも教科書を中心として授業を進めるという制約があるため、有効な演習と思われる活動も十分には時間を確保できなかった。

④展望

今回 CALL 教室を利用して、一般的な普通教室での授業に個人学習の要素を取り入れた授業を年間を通して行うことができた。ただし、さらに CALL 教室の利点を生かした授業を展開しようとするなら、教科書の選択にも配慮すると同時に、教材・授業活動を十分精選して臨まなければならないであろう。とすれば、先の「英語表現 I」の例と同様、もしくはそれ以上に、CALL 教室の機能をフルに活用できる市販教材ソフトウェアを導入するという選択肢も望ましく思われる。

3. 平成20、21年度の授業例

筆者は、授業担当学年の関係で、平成19年度のCALL教室活用法をそのまま継続した授業はその後行っていない。以下に平成20年度以降で筆者も担当したCALL教室利用授業の例を紹介するが、学生に対してアンケートをとる等の検証は行っていないので、概要の報告にとどめる。これらの授業例は、筆者のアイデアというよりも、前年度の担当者あるいは他の担当者のアイデアによるところが大きい。本校英語科のCALL教室活用の取り組み例として見ていただきたい。

3.1 平成20年度「英語表現Ⅱ」(2年、通年2単位)

本校現カリキュラムでは、「英語表現Ⅱ」は主としてライティングを扱っている。前期中間試験まではライティングのテキスト(文科省検定教科書)を用いた普通教室での授業のみであったが、前期末の期間から、NET(ネイティブの英語指導員)との共同授業が月2回程度の割合で入った。その共同授業の際はCALL教室を使用した。

NETによるワークシートでのライティング演習などを行ったほか、英文エッセー(自由英作文)のライティングに取り組ませた。英文エッセー作成では、学生は各自のパソコンでワープロソフトを使い英文原稿を作成し、ファイルをサーバ・コンピュータの所定のフォルダに提出するとともにプリントアウトしたものも提出する。プリントアウトされた原稿は、NETによる添削を受ける。添削済みの原稿を返却された学生は、ファイル上で訂正を行う。原稿訂正の際には、NETと日本人教員がCALL教室を巡回し、学生の質問を受けて訂正を助ける。学生は、訂正済みのファイルを再提出する。

このような英文エッセー作成の指導は、従来のように普通教室を使って紙ベースで行うことも可能であるが、CALL教室を使用しNETの参加を得ることで、より効率的で相互作用のある指導にできたと思う。

3.2 平成21年度「英語表現Ⅲ」(3年、通年1単位)

「英語表現Ⅲ」では、リスニング演習、英会話の基礎演習(NETとのグループ会話)、英語による短いプレゼンテーション演習などを行っている。授業は全てCALL教室を使用し、(5月末以降は)毎時間NETとの共同授業の形をとっている。

リスニング演習は音声CD付のテキストを使用していて、普通教室でCDデッキを用いた一斉演習も可能だが、CALL教室活用という意味で、「作って教材」を使用して学生が各自自分のパソコンでリスニング問題に取り組めるようにしている。このような使用法によって(制限

時間はあるが)各自が自分のペースで問題に取り組むことができています。会話演習では、CALL教室に隣接する「CALL準備室」のスペースを利用し、学生4人グループ(毎回2～3グループずつ)とNETが会話をする。会話をしているグループ以外の学生は、各自簡単な英語プレゼンテーションを行うための英文原稿作りを行っている。日本人教員はその間、学生の質問を受けるなどしている。学生は原稿ファイルを完成させ提出した後、NETの添削を受け、原稿訂正、その原稿を元にプレゼンテーションを行う。会話演習、英語プレゼンテーションともに年間で1グループ(人)2～3回行う予定である。

3.3 平成21年度「英語Ⅲ」(3年、通年3単位)

「英語Ⅲ」はリーディングを中心とした科目で、週3時間の授業のうち2時間を普通教室で、残りの1時間をCALL教室で行っている。普通教室ではリーディングのテキストを用いた一斉授業の形式で授業を行っているが、CALL教室では別のテキスト(英語構文に関する問題集)をパソコンを使って解答していくという、個人演習形式の授業を行っている。学生はテキストの解説・ヒントを見ながら問題に解答する。解答は、3.1の場合と同様にファイルで提出する。教員は、学生が解答中、質問があればそれを受けるが、基本的には自主学習の形態である。なお、教員は進度が速い学生のために、次のレッスンの「追加ヒント・解説」を作成し参照できるようにしている。また、一定の期間をとった後、各レッスンの「解答例」を提示する。これらの提示は「作って教材」を通じて行っている。この他、時間に余裕がある学生には、2.2でふれた「COCET 3300」のオンライン学習をするように指示している。また、基本が自主学習の形態のため、数分間これらの学習が中断してもあまり影響はない。そこで教員が学生を個別に指名し、別の指導(例えば、英文音読の指導やテストなど)を並行して行うこともある。

4. おわりに

筆者が主として担当した平成19年度のCALL教室利用授業の報告の「問題点と対策」「展望」であげた課題点のうちいくつかは、その後の英語科教員の工夫により克服されつつあるように思われる。また、工夫だけではカバーしきれない大きな課題としてあげられていた「CALL教室の機能をフルに活用できる市販教材ソフトウェアの導入」が、校長をはじめとする本校関係者の方々のご理解とご支援により今年度中にも実現するはこびとなった。これにより、本校のCALL教室活用は新たな段階に入ることになるであろう。新しいソフトウェアとこれまでの活用法を適切に整理・融合させて、より効率的・効果的なCALL教室活用をめざしていきたい。